23(1)推/2

ナショナルバイオリソースプロジェクト
平成 23 年度第 1 回推進委員会
議事概要

1. 日時・会場

平成 23 年 7 月 22 日（金）13：00～15：00

金融庁 13F 共用会議室 1320

2. 出席者

推進委員会委員

	漆原　秀子	筑波大学大学院生命環境科学研究科教授
	岡田　清孝	自然科学研究機構基礎生物学研究所所長
（副主査）	小幡　裕一	理化学研究所筑波研究所バイオリソースセンター所長
	勝木　元也	自然科学研究機構理事
	河瀬　眞琴	農業生物資源研究所遺伝資源センター長
（主査）	小原　雄治	情報・システム研究機構国立遺伝学研究所長
	篠崎　一雄	理化学研究所横浜研究所植物科学研究センター長
	城石　俊彦	情報・システム研究機構国立遺伝学研究所 系統生物研究センター教授
	林　　哲也	宮崎大学フロンティア科学実験総合センター教授
	森脇　和郎	理化学研究所バイオリソースセンター特別顧問

文部科学省

田中　一成	ライフサイエンス課ゲノム研究企画調整官
細野　亮平	ライフサイエンス課生命科学研究係長
松村　紘希	ライフサイエンス課生命科学研究係

独立行政法人理化学研究所

尾前　二三雄	筑波研究所研究推進部　企画課

国立遺伝学研究所

野田　潔	情報・システム研究機構国立遺伝学研究所管理部長
松永　茂	情報・システム研究機構国立遺伝学研究所管理部研究推進課長
新田　清隆	情報・システム研究機構国立遺伝学研究所研究推進副課長

ナショナルバイオリソースプロジェクト事務局

佐藤　清	事務局長
小島　美智代	事務局員
高野　道子	事務局員

アコスタ　真紀　事務局員
坂西　絵美　　事務局員

3.　議事

開会（参考資料 1,2,3,4）
挨拶（文部科学省）
1.平成 22 年度第 2 会推進委員会議事要旨確認（資料 1）
2.今後のバイオリソース整備のあり方について（資料 2）
3.平成 23 年度「ゲノム情報等整備プログラム」の課題の選定について（資料 3）
4.リソースの運営委員会の開催状況について（資料 4）
5.平成 23 年度 NBRP の活動計画について（資料 5）
6.その他（東日本大震災、シンポジウム、成果報告会等）（資料 6）
7.閉会

4.　配付資料

資料 1　：平成 22 年度第 2 回推進委員会議事要旨
資料 2-1：今後のバイオリソース整備のあり方（概要版）
資料 2-2：バイオリソース整備戦略作業部会「今後のバイオリソース整備のあり方について」　ライフサイエンス委員会（第 62 回）平成 23 年 6 月 30 日
資料 3　：平成 23 年度「ゲノム情報等整備プログラム」の課題の選定について
資料 4-1：平成 22 年度運営委員会の開催状況
資料 4-2：運営委員会報告（森脇委員）
資料 5-1：平成 23 年度 NBRP の活動計画一覧表
資料 5-2：Site Visit 実施概要
資料 5-3：平成 23 年度 NBRP 広報活動予定
資料 5-4：NBRP 事務局ホームページの紹介
資料 6-1：東日本大震災における被害状況と復旧状況一覧
資料 6-2：バイオリソースの防災シンポジウム、NBRP 公開成果報告会

参考資料 1　：平成 23 年度 NBRP 推進委員会委員及び推進委員会要綱
参考資料 2　：平成 23 年度 NBRP 推進委員会委員及び WG 委員名簿
参考資料 3　：平成 23 年度 NBRP 運営委員会委員長名簿
参考資料 4　：平成 23 年度 NBRP 実施機関一覧
付属資料 1　：NBRP パンフレット 2011 年度版

以上

議事概要

1. 開会

・佐藤事務局長より配付資料の確認、榊委員の委員辞退の説明があった。
・小原所長が主査、理研 BRC の小幡委員が副主査に選出された。
・文部科学省ライフサイエンス課田中調整官より挨拶があった。

2. 平成 22 年度第 2 回推進委員会議事要旨確認

＜佐藤事務局長より、資料 1 について説明＞

・特段の意見もなく確定した。

3. 今後のバイオリソース整備のあり方について

＜田中調整官より、資料 2-1、2-2 について説明＞

・資料 2-2 がバイオリソース整備戦略作業部会の報告書、資料 2-1 がその概要版で、本報告書は 6 月 30 日開催のライフサイエンス委員会にて了承され、公表されている。
・バイオリソース整備はライフサイエンス分野における研究基盤として必要不可欠なロジスティクスで、国家プロジェクトとして引き続き適切に推進する必要がある。それを踏まえて、今後の課題と整備の方向性について 6 項目のご提言をいただいた。
・最後に「質」の問題と、何を戦略的に整備していくか、継続性をいかに確保していくかについて提言をいただいた。開発については、条件を付した上で開発に着手すべきではないかという一定の結論が得られた。評価については、現在、評価委員会でこの報告書を参考に作業を進めている。
・「一度失われれば二度と戻らない」は、リソースの枕言葉に使ってきたが、震災で一部そういったものが出てきた。これは大変重いことではないかと考えている。
●バックアップについては、具体的なことは議論されているのか。（篠崎委員）
　→西日本、東日本と広域的に取らなければならず、体制整備に必要な予算が確保できたら報告する。（田中調整官）
●「研究基盤として必要不可欠なロジスティクスとしての役割を担う」は大事なことで、ロジスティクスは「国家プロジェクトとして」でないとできないと言っている。皆さんが言い続けてきたことが言葉になったのは非常に素晴らしい。（勝木委員）
●ロジスティクスだから継続性が重要で、「2010 年世界最高水準」も、2011 年の次の目標を言わないといけない。「質」の向上は、単純にリソース自体の質だけでなく、それが新しくなって、よく使われて研究成果につながるよう、成果のフィードバックや、実費負担のクレジットカード化もさらに進めていかないといけない。（小原主査）
●新規リソースもきちんと議論して、変質しないよう考え方を整理すべき。来期は新規リソースに新しい生物種も出てくる。選考委員会が選考するが、NBRP 全体で必要なものの提言をするのも推進委員会の見識になってくる。（小原主査）
　→7 月に生物遺伝資源委員会で意見集約した。新しい生物種として NBRP に参加させたいものが 6 つほどあり、13 ぐらいの個別のリソース開発計画も出てきた。これは選考委員会マターだが、いきなり選考委員会で選ぶと混乱するだろう。日本全体を見た

とき、NBRP プロジェクトとしてどれが必要不可欠か、提言のようなたたき台を推進委員会が考える必要があるのではないか。（城石委員）
●第 3 期は、今回の評価を受けて公募になるのか。（小原主査）
　→継続分と新規の部分という形で、2 期と同じ形になる。（田中調整官）
●旧来の収集、保存、提供の中に新しいバイオリソースを入れることは難しいと思うので、やるとすれば別のプロジェクトとなるかと思う。（小原主査）
　→今、評価の途中で、各リソースの効率化や事業規模の見直しの情報を聞きながら、一定の余裕が出てくるところに新規部分がかかってくると思ったが、対外的に申し上げられる状況ではないので、評価が出た 8 月以降に検討したい。（田中調整官）
●第 3 期、新しいものを公募するときのタイミングはどうなるのか。（城石委員）
　→2 期と同じで、継続分の審査を今年度内にして、継続事業を認めて、そこで残った予算の中で、年度が変わったときに新規の公募手続きになる。（田中調整官）
●基本的には中核機関、分担機関から出てくる開発という意味か、新しい開発を入れるのか、枠組みをきちんとしないと、ロジスティクスの意味がなくなる。（勝木委員）
　→二つあって、新しい生物種のリソースをやることと、既存の中でも新しい開発をするが、中核機関がそのリソースのために計画をすることがある。（小原主査）
　→それがひっくり返ってしまうと、とんでもないことになる。（城石委員）
　→ロジスティクスは一応できたので、もっと魅力を上げないといけない。兼ね合いは難しいが、そういう要素は一応は認めた方がいいという理屈だ。（小原主査）
●ゲノム発足の時代は、シークエンスも含めてミュータントを取ること等が進んで、それはむしろ研究の先端として進んできたが、今はロジスティクスに含まれる。個人研究と公的なロジステックスの線引きをしなくてはいけない。（勝木委員）
　→ゲノム情報等整備プログラムは続いていて、大事なものに関してはゲノム情報も付加している。加えてミュータントや改変したものを作ることは、ロジスティクスとしても必要だが、この中では認めてこなかった。（小原主査）
　→今までは個別研究としてやってきて、それを広げる。中心には個別のことがあるのが一番の評価だった。いいものが出てくると、それを広げてもらうため仲間に入れる。その辺は、そういう歴史を知っていれば間違いない。（勝木委員）
●継続分の公募をかけるときの中身が、収集、保存、提供というロジスティクスの中核、プラスアルファで中核機関が新しいものを集めて作ることも入れるのか、ゲノム情報と同じような形で公募するのか、そのタイミングはどうか。（小原主査）
　→提言をいただいて、どういった仕組みを作っていけばいいか考えている。収集、保存、提供というロジスティクスとして重要な分野をおろそかにはできない。また予算が増えない中で、既存の枠の一部を開発に回すというコンセンサスを各リソースから得る必要があるが、予算要求はなかなか難しい。（田中調整官）
　→枠組みを決めるのは文科省だが、決め方はここで議論されてもよい。（小原主査）
　→選考委員会だけにそこをお願いされると荷が重い。例えば開発を仮に動かしたとき、一つの中核機関の大枠の予算の一部を使うのか、外枠でゲノム情報や基盤整備の技術の形でやるのか、どういう形がいいかという議論は必要だ。（城石委員）
　→報告書 13 ページに幾つかの条件がある。これに合致したもの、候補になるものが

あるかを議論し、あらためて審査をかけていく形になると思う。（田中調整官）
●「どこか」というのはどういう人か。（小原主査）
　→中核機関も含めたコンセンサスを実施者の皆さんで得ていただく。予算の一部を開発で使うというコンセンサスをどう得ていくか。今年はゲノム研究の予算の一部を流用したが、似た考え方を開発でもしていく。基本はゲノムと技術基盤だが、その一部を使っても開発すべきものを、目利きの先生方が推薦していく形になるかと思う。（田中調整官）
●収集、保存、提供の基本的なものは2期やってかなり定着しており、次の第3期の計画の中では、質の充実を最初の申請時に書かせてもいいのではないか。選考時に必要でないと思えばバッサリ切ることもあり得て、「開発」の部分は意味がありそうだからやってよいという選考をすることもあるのではないか。今までは開発系は一切禁じていたが、必要だと思われるものは書いておく。（漆原委員）
　→必要と思うものを選考委員会にぽっと出して判断すると微妙だというのが城石さんの意見で、その前に運営委員長会議で真に必要なものを議論する。（小原主査）
　→プレにやるのか。（漆原委員）
　→個別のリソースの描く計画に開発が入ることは考えていない。収集、提供、保存を中心とした予算に、特別に一定の条件を満たしているものについて、共有財産である予算の一部を使ってやるのだから、全体のコンセンサスを得てほしい。（田中調整官）
　→そうすると、厳選された幾つかのリソースを格段に高めることになる。（漆原委員）
　→開発がそのまま質を高める手段ではないはずだ。（田中調整官）
　→質の充実とは開発、開発整備だと思っていたが、そうではないのか。（漆原委員）
　→どういうものをそろえるかも質で、使われて、成果が出ることが一番大きな質だ。開発したから即、質が上がるわけではない。（小原主査）
　→科研費とは違って、それを取れば自分のためになるものではないが、それを付け加えると格段にインセンティブが上がり、リソースも良くなる。こちらがお金を出してでも、いいリソースを整備するやり方で初めて開発が含まれる。競争させると研究の競争になるので、審査の前に、ここでプレのセレクションとディスカッションはする必要がある。（勝木委員）
　→補助にふさわしいかを、先生方でコンセンサスを得ていただきたい。（田中調整官）
　→勝木先生と同意見だ。このリソースや開発で科学的な進展があることを明確にする。NBRPのフレームワークも基盤整備と別に構築する必要がある。開発インフラから最終的なアウトカムを予測できないと、認められない。（小幡副主査）
　→それはそうだが、個別研究である程度頭を出して、この話が持ち上がっている。（勝木委員）
　→ヨーロッパは、全部ゲノム情報でリソース整備しようという状況。（小幡副主査）
　→そこが日本は貧しく、危ないので危惧している。（小原主査）
●独り言ばかり言ってもしょうがない。議論して、新しいもの、知らないものを出し合って、やっていく。アンケートは独り言だ。（勝木委員）
　→自分のリソースだけでしゃべっている。（漆原委員）
　→まさにそこがポイントだ。やる人が手を挙げて、周りの人もそれをサポートする

空気が出来上がっていることが重要だ。(城石委員)
●いずれにしても提案がないといけない。それをもんで議論して、コミュニティにフィードバックして、選考委員会で評価してもらう。早めに情報をいただいて密なやりとりしないと、われわれも責任を持ってぜひということは言えない。(小原主査)
●いろいろな生物種で遺伝子改変を入れてというプロジェクトがかなりの規模で動いている。出来上がったものをきちんと維持し、提供するシステムの継続は、欧米のプロジェクトは弱い部分もある。そこをバックアップできるNBRPの体制は世界で唯一で、永続性は強みだから、崩すともったいない。きっちりした枠組みで残した方が安全だ。ゲノム情報、基盤技術、開発はわきに置いて、そこでしっかりいろいろな角度から眺めて、運営委員会や研究コミュニティが本当にそれを欲しがっているか、ヒアリングをして、選考委員会に情報の橋渡しするのがスマートではないか。(城石委員)
●収集、保存、提供という継続性を大事にしているところと、開発やゲノム情報の整備などアドホックなものは、別途分けて公募した方がよい。(小幡副主査)
●その方が安全だし、いろいろな見方で研究コミュニティにとって必要なものを議論できる。中に入り込んでしまうと難しい。(城石委員)
●開発のやり方を中に入れてしまうのは危ない。食われてしまう。(森脇委員)
●研究コミュニティが手を挙げていなくても、この推進委員会の中で、これは今やるべきではないかというものが、出てくる可能性はあるだろう。(城石委員)
●NBRPのアネックスを作る話もして、中にへこませるのではなく、外に太らせる予算要求をする。文科省の人にはそういう頭でお考えいただく。(勝木委員)
●ここ数年の基盤技術、開発も質が落ちている。もう少しプロダクティブなものに変える意味でも、基盤技術とゲノムと新規リソースの開発を一緒にして、収集、保存、提供の根幹の部分とは別にした方がよいのではないか。(小幡副主査)
●開発は1年で終わるものも5年以上かるものもあり、プロジェクト期間をどう設定するかは工夫が必要だ。(城石委員)
　→予定の期間は審査のとき重要項目になるので、期間を見て総合判断で行うということでよいのではないか。(田中調整官)
●次期の設計に当たっては、ロジスティクスの中核は今程度に残すが、外出しで、ゲノム情報と基盤技術と新規開発的なものの枠をぜひ作るよう議論して、何らかの意見を付けて、審査委員会でやっていただくような形が望ましい。(小原主査)
●現場では細やかなサンプルチェックや質管理をしており、それが非常に大事な質の充実だが、そこは収集、保存、提供の中で頑張れというスタンスか。(林委員)
　→そうだ。そこはやり方次第でコストも下げられるかもしれない。(小原主査)
　→それをやるから、利用者である研究者がクオリティコントロールをしなくて済んでいる。(小幡副主査)
　→10年間、ストイックにやってきた成果だと思う。(城石委員)
　→要するにそれで人が育つ。人を育てないとコントロールできない。(勝木委員)
　→ATCCの話を聞くと、取り違えとか増えないケースが頻発し、質が落ちているようだ。その点、日本のリソースの人たちは丁寧にやっている。(林委員)
　→NCA は、間違ったリソースを使うことは税金の無駄使いだとガイドラインも作っ

ているが、質は保証しない代わり早い・安いという企業もある。（城石委員）
●恒常的・安定的な運営と人材確保が中核機関に必要だと国も位置付けてはいるが、仕組みをどうするかは宿題で、悲鳴が上がっているところもある。（小原主査）
●これはトップか、実際に手を動かす人の話か。（勝木委員）
　→両方だ。（小原主査）
　→まずはトップだ。その人が辞めたら大学が取ってくれるか分からないから、運営委員会と推進委員会が一緒になって、このリソースは次の機関に移すといったステアリングがわれわれに求められているような気がする。（小幡副主査）
　→次の期は、かなり一生懸命ステアした方がいいと思う。（小原主査）
　→若い人が来たところは元気にやっているが、「次がいない」と今の代表者に言われると困る。（小幡副主査）
●そこにはいないけれども、ほかのところにいるということはないのか。（勝木委員）
　→それを運営委員会や推進委員会で一緒にやりたい。（小幡副主査）
●トップの人がよい研究をした人で、なおかつリソースが大事だと悟った人でないと駄目だ。そういう人を探して、引き継いでいかないといけない。　食いものにしようという人に来られたら困ってしまう。（森脇委員）
●雇われマダム的にやっているのも駄目だ。その辺も推進委員会はあまり手を突っ込みたくはないが、指導といったらおこがましいが、やらなくてはならない。（小原主査）
●リソースの行き先がないときは、推進委員会や運営委員会と合同で次はどうしなさいという指導も必要ではないか。（小幡副主査）
●大学共同利用機関の役目の一つでもあるが、その大学共同利用機関も余裕がなくなっているから、大学はもっとそうだろう。（勝木委員）
●この議論は、運営委員会では、現実にはしていないのか。（林委員）
　→いろいろだ。継続的にハイレベルで続いていってもらわないと困るので、推進委員会の議論として、かなり重要なことではないかと思っている。（小原主査）
●人事が大学の人事権に抵触するので、そこが一番難しい。（城石委員）
●駄目だったらよそに移すことが推進委員会の決めることではないのか。（漆原委員）
　→それも運営委員会と相談して、次の中核機関を誰にするかを相談してやる。最悪は捨てて外国に持って行く。だが、その前にやることはたくさんある。（小幡副主査）
●この議論を第 3 期の再提案にも入れたらどうか。（林委員）
　→継続性は評価の視点で、この事業は、中核機関、分担機関、プラス運営委員会という研究者コミュニティの活動が一体であることが特徴だ。5 年の間に退官等が予定されているなら、コミュニティしてどう継続するかを議論していただく。（田中調整官）
●中核機関の人にはあまり負担もかけたくはない。（小原主査）
●運営委員会で人材育成のことはテーマにはなるが、解決しそうなところはあまりない。　運営委員は外の人なので維持機関に対してものを言いにくいということもある。推進委員会の意見が助けになる場合があるかもしれない。（森脇委員）
　→そうしないといけない。情報を集めてやらないといけない。（小原主査）
●やる意思がある人がいても、もっといいポジションがよそにできると、移る可能性がある。リソースが全く評価されていない状態だと、よそに行く方がどんと重くなる

のが、トップと後継者の問題だ。(漆原委員)
　→個人がどちらが得かを考えると、機関自体がリソース事業を大学の中に置いておくことが得かどうかも考える。そういう面では、二重の問題がある。(城石委員)
　→機関が賛成していないところも多いのか。(漆原委員)
　→すべて全面的にバックアップしようというところばかりではない。(城石委員)
●第3期は継続性と質の向上をかなりすべきだと思うので、情報を集めて議論を尽くしたい。問題のあるところは話を聞くため、Site Visit をしている。(小原主査)
●聞くというのは、学部長や学長に聞くのか。(勝木委員)
　→Site Visit に行ったら、来るときもある。(小原主査)
　→最近、ナショナルバイオリソースを足掛かりに、リソース提供を看板に挙げたいという大学上層部が幾つか来ており、その動きは応援する。看板になると意識してくれると、感心するぐらいサポートしてくれる。きちんと成果を報告してもらえば、自分の施設名を冠したリファレンスが入ることをどう徹底していくかも、重要なポイントではないかと思っている。(田中調整官)

4.　平成23年度「ゲノム情報等整備プログラム」の課題の選定について
＜田中調整官より、資料3について説明＞
・資料3は本年度の「ゲノム情報等整備プログラム」の選定の結果である。「ラット／F344／ラットの全ゲノムシークエンス解析／京都大学」「カタユウレイボヤ／カタユウレイボヤゲノム情報の整備とリソースの高度化／筑波大学」の2本を採択した。この予算については、今年度のリソースのバックアップにやむなく回したので、本数としては寂しいが、ご理解いただき、お認めいただきたい。
●科研費は7割だけ分割払いだが、これはどうなっているのか。(小原主査)
　→こちらは今のところ、セーブはかかっていない。(田中調整官)
　→概算払いをするために、財務省と今、協議をしている。(細野係長)

5.　リソースの運営委員会の開催状況について
＜佐藤事務局長より資料4-1について説明＞
・昨年度1年間で延べ35回開催され、1回は震災で中止になった。内容は、活動報告のほかに、前半は実費徴収、後半は第3期NBRPについて議論された。昨年の推進委員会で各リソースの運営委員会は非常に大事であることから、推進委員を運営委員会へ派遣してはどうかという話が出て、森脇委員に事務局と一緒に、各リソースの運営委員会に参加していただいた。
＜森脇委員より、資料4-2について説明＞
・全部は出られなかったが、18の委員会には出た。
・分担機関の代表者に熱意があると、ユーザーも熱心になり、ついてくる感じはした。やはり中心になる人が大事だ。
・リソースは小さくても、アクティブなグループは将来伸びていくだろう。発展途上のリソースというカテゴリーがあったが、それはそれで意味があると思った。
・大きなユーザーがついているリソースは、やはりリソース事業が一般に活発で、費

用対効果では非常に評価ができる。ただ、大きい事業は専門性が大きくなり、支援する側がきちんとしたシステムで順調に動いているとそれが当たり前となって、ユーザー側にみんなで支えるという意思が、弱くなる傾向はある。
・研究成果を集める、戻すというのは、どこの委員会でも問題になっており、何か簡単なシステムを考えてもらえないかという意見が出ていた。
・リソースの自家使用を、分譲実績に入れさせてほしいということが複数あった。
●自家使用はよくなったのか。(小原主査)
　→リソースを自分のところも同じようにアプライして、使いきる。つまり、先取りはやめてくれということだ。(田中調整官)
　→実績に入れてもかまわないとは、理解されていなかった。(森脇委員)
　→今年度からだ。ご要望いただいたとおりにやることができた。(田中調整官)
　→去年までは駄目だったので、まだ行き届いていないようであった。(森脇委員)
・教育用の活動、教育用に分譲したものを、分譲実績で認めてくれというのもあった。
●基本的に基礎研究の基盤なので。ただ、提供してはいけないということではない。分譲実績に入れずに、実費を取って出していただく分はかまわない。ただ、本来研究に回るものを提供する形で出されると、これはまた趣旨に反してしまう。(田中調整官)
　→それは別途、大学のお金でやったらいいという話になる。(小幡副主査)
　→そこまで詮索する気はないので、実績の方に入れずに、事業は事業としてやって、各中核機関がご自分の判断で、リソースの余分があって影響しないと考えるのであれば、それを教育用に提供するところを妨げるものではない。(田中調整官)
　→そこはきちんとした方がいい。研究でも教育でもなく、系統保存として取っておかれたものを、衣替えしてこういう形になったので、それが侵略されると研究や教育の予算に組み込まれる。科研費や教育に組み込まれると困るので、系統保存を大事にしておかないと、すぐ津波に遭って全部引っ張られてしまう。(勝木委員)
　→その場では難しい問題があるとだけ言っておいた。(森脇委員)
●技術の開発が随分進められている。凍結はバックアップの意味でも非常に大事だが、カイコは卵巣と精巣を凍結することができそうで、大変いい話だ。
・NBRP が補助金になって、大学としては機関がもっとバックアップしてくれてもいいと思うが、きちんとサポートしてくれる大学も、そうでもないところもある。決済についても、結局は基盤機関がプロジェクトをどのくらいサポートしてくれているかに関係すると思った。
●カードをやっていない大学で、研究者の先生方が本部に行っても相手にされない事例で、私どもが前面に立って改善を求めて成功した例が幾つかある。文科省の担当の方に言っていただければ、いつでも間に入る。(田中調整官)
・バイオマスやバイオエネルギーに関係した国家戦略にかかわるリソースは、非常に元気だ。基礎的な学術研究用リソースがにわかに社会性を持つケースもあるようだ。
・ニホンザルで、SRV4 のウイルス感染が収まったのはよかったが、実験動物としての品質管理とモニタリングのシステムのレベルを、もう少し上げないと困る。

6.　平成 23 年度 NBRP の活動計画について

＜佐藤事務局長より資料 5-1,5-2,5-3,5-4 に基づいて説明＞

・資料 5-1 が NBRP の年間計画の一覧表。資料 5-2 は Site Visit の実施概要。

・資料 5-4 は、事務局のホームページで、このたび内容の見直しを行った。

●Site Visit で岡山に行った。オオムギはああいう形で圃場にまいて維持していくのは大変だ。後継者がいないと、こういうところは続けられないと思う。(漆原委員)

●キクはいい後継者が出て、自家受精もできそうで大変よかった。(小幡副主査)

●9 月に九大のカイコとアサガオ、ミヤコグサをいずれ考えている。(佐藤事務局長)

7. **その他（東日本大震災、シンポジウム、成果報告会等）**

＜佐藤事務局長より資料 6-1 に基づいて説明＞

・今回の震災について、文科省から緊急時連絡先一覧表を作ってほしいという要請があり、代表機関、分担機関、それぞれ課題管理者プラス代理１名の電話番号、E メール、携帯番号、携帯メールを調査して一覧表として文科省に提出した。

・資料 6-1 は震災の被害状況と 3 カ月後の復旧状況。リソースを失ったのはごく一部だが、細胞性粘菌やニッポンウミシダ等で被害が出た。その他、停電や断水、炭酸ガス、液体窒素が入らず、インフラ的な影響が出たが、3 カ月後には回復している。

・NBRP の実施機関は首都圏から西日本に偏っており、東北は全く空白であまり影響はなかった。ただ、東海・東南海・南海地震に備え、バックアップ体制に取り組みたい。

＜田中調整官よりバックアップ体制について説明＞

・震災後には各リソースの先生方を煩わせたことをおわびしたい。今回連絡表を作っていただいたので、今後は先生方の分担を配慮してご迷惑をかけないようにしたい。

・バックアップ体制に係る追加の予算配分は合計 6000 万円弱で、ゲノム研究費の一部を流用し、推進委員会の主査のご理解をいただき、何とか実現しようとしている。

・わが国の学術研究に欠くことができないもので、いったん失われると復旧が困難になるものという条件を付し、東日本と西日本それぞれにリソースを持ち合う体制を作るということで、今般まとめた。

・トータル 16 の機関からバックアップのための追加予算の要望額が 6283 万 3000 円。設備、人件費、リソース移送費用などが内訳で今精査している。今のところ予算枠には収まる。人件費も 8 月分からで、当初予算の中に既にバックアップ作成経費の形で入っていたところは増額はしない等、精査している。今回の震災で直接被害を受けたところについては、災害復帰にかかる経費を考慮する。

・交付の内定書が今月中で、交付の内示を受け 8 月からすぐに作業に入っていただけるのではないか。最終的なお知らせは 9 月中旬を考えている。

・ゲノム研究費や予備費が財源なので、適正な予算執行に努めていただきたい。

●6000 万円で 16 だから 1 件 400 万円くらいか。(小原主査)

　→凍結保存が困難なもの、人件費を含めてのものと、リソースごとに差がある。(田中調整官)

●後年度負担も生じるのか。(小原主査)

　→恐らく生じる。バックアップ維持経費の形で来年要求していただく。(田中調整官)

●凍結できるものはフリーザーを持ち合うというイメージか（小原主査）

→そうだ。それとフリーザーの電気代だ。（田中調整官）
●分担機関以外にもということがあるか。（小原主査）
→そういうケースもあるが、分担機関でなくバックアップの委託機関だ。リソースによっては民間の機関を利用したいところもある。リソースごとに工夫して、安心して任せられるところを選択していただいたと理解している。（田中調整官）
●カイコは凍結できそうだだが、まだ全部できていない。（小原主査）
→カイコは毎年、維持すべき系統を、信州の風穴に送っている。（田中調整官）
●非常にいいアイデアだが、管理は大丈夫か。（城石委員）
→もともと養蚕場か何かで、これまでもそうしてきた。（田中調整官）
→そういうリソースは伝統的にノウハウが積み上がっている。（小幡副主査）

＜佐藤事務局長より資料 6-2 に基づいて説明＞
・今回の震災の情報を共有し、今後に活かしたいということで、NBRP バイオリソースの防災対策シンポジウムを開催する。東北大学の動物実験センターの笠井憲雪先生に「3.11 東日本大震災報告」ということでお話しいただく。
・事例報告として、NBRP で今回の震災の影響を受けた筑波地区のリソースの関係者と、1 月の新燃岳の火山噴火の事例報告、バイオリソースのバックアップ体制については、文科省からコメントをいただく。
●バイオリソースは災害に非常に弱いことを知らしめるのか。（小原主査）
→東北大学で直撃弾を食らった施設ということで、皆さんで、震災の真ん中で苦労された先生の話もお聞きいただければということだ。（田中調整官）
●関係者で情報共有というイメージか。（小原主査）
→そうだ。NBRP の関係者で情報を共有していただき、そういう事態に陥ったときにどうすべきだったかという話が聞けると考えている。（田中調整官）
・NBRP の公開成果報告会を来年 1 月 20 日に予定している。NBRP が 2 期目を終わって、3 期目に入るという区切りの年でもあり、記念行事という形で成果報告会をする。
●2 期 10 年やったが、ロジスティクスは縁の下の力持ちなので活動の正当な評価が得られない。10 年の区切りに、関係者や一般の方にバイオリソースの重要性をご理解いただけるよう、成果を見ていただく企画をお願いした。（田中調整官）
●推進委員の先生方には、来年 1 月 20 日はぜひ確保していただきたい。（佐藤事務局長）
●これにはキャッチーなタイトルも必要だ。（小原主査）
●病原微生物の運営委員会に、今年推進委員として参加させていただきたい。（林委員）
→分かった。千葉大学で日程が決まれば連絡する。（佐藤事務局長）
→大学が全然支援していない。（勝木委員）
→もともと三つの寄せ集めで、グリップできているかという問題もある。（小原主査）
→推進委員がそれについてやっていただけると本当にありがたい。（小原主査）

8. 開会